

学術部おすすめ！読んでおきたい特集記事

デンタルダイヤモンド／2017. 5月号（中島副委員長 記）

○高齢者のリスクをマネジメントするリカレント講座(大渡 凡人)

＊全身疾患をもつ高齢者が特別ではなくなったわが国の歯科医療において、リスクマネジメントは重要性を増している。しかし、高齢化社会になったのは比較的最近で、従来の歯科教育システムは高齢者に対応していなかった。そこで、九州歯科大学ではすでに臨床で活躍している歯科医療従事者に必要な知識・技術を提供するリカレント教育を開始した。教育内容の、「医療面接」「高血圧」「狭心症・心筋梗塞」「脳血管障害」「パーキンソン病」「慢性腎臓病」「血液透析」「糖尿病」「経口抗凝固薬」について詳述してあります。御一読をお勧めします。リカレント教育とは、「循環する教育」を意味し、従来の教育が学校から社会へという方向で動いていたのに対し、一度社会に出た者の学校への再入学を保障し、学校教育と社会教育を循環的にシステム化することを課題とする生涯教育構想のひとつ。

○スウェーデンで開発された最先端の殺菌および歯垢・歯石除去技術

（ステファン・フィッケル著 朝波惣一郎 訳）

＊カリソルブという蝕除去剤を覚えていらっしゃるでしょうか？歯周病にもインプラント周囲炎にも適応できる次亜塩素酸とアミノ酸からなる殺菌剤ペリソルブが発売され、高い効果が認められるとの症例報告がされています。面白そうです。

歯界展望／2017. 5月号（小野委員長 記）

展望の5月号に身近の先生のお名前を見つけた。シリーズ「天然歯を守る」と言う特集がある。今回は、岡山市開業の大江丙午先生が投稿されている。内容は広汎型侵襲性歯周病患者の18年に及び長期治療経過である。この症例は、日本臨床歯周病学会年次大会に於いて、最優秀ポスター賞を受賞されたものだそうだ。ぜひ一読下さい。

○特集 もっと知りたい！「主機能部位咬合理論」

（東北大学大学院教授 服部佳功 東京証券業健康保険組合診療所 加藤 均）

＊「主機能部位咬合理論」というものを聞いたことのない先生方も、「ヒトはストッピングを短く切ったものを無意識に噛ませると、いつも同じ場所で噛んでいる。」という論文があったことはご記憶があるのではないのでしょうか。今回この論文を20年前に発表された加藤先生が、Q&A形式で詳しく解説されている。簡単に日常でも利用できるところもあるように思うので、一度お試しになってみては？

ザ・クインテッセンス／2017. 5月号（岡崎副委員長 記）

○高齢者の根面う蝕をどう管理するか 多歯介護時代の戦略（菅 武雄）

＊根面う蝕は進行すると歯頸部破折を起こし、機能歯の破折により咬合喪失に至ることがある。筆者らの再生(再石灰化)プログラムは、基本は非切削、実質欠損は清掃性、自浄性を考慮して早期充填。口腔衛生管理がスタートする前に環境を整え、歯科衛生士による管理と並行して実施する。ポイントは2種類のグラスアイオノマーセメント(GIC)の使用とGIC表面に高濃度フッ化物ジェルを塗布するフッ素リチャージシステムである。手順は①口腔内診査、ブラークの染め出し。ケアの頻度の推定や自浄域の範囲を知る。②超音波スクレーラーによるブラーク除去。チップは先端を歯面に当てずに平行に接触させて歯面を保護し、性状を触知する。③実質欠損の評価。充填用GIC(Fuji IX、ジーシー社製)による暫間充填④塗布用GIC(Fuji VII、同)の歯面への一層塗布④フッ化物ジェル(2,000ppm)の応用。歯面全体を強化する。

○最新のう蝕病因論と口腔マイクロバイーム(杉山精一 伊藤 中 山下喜久)

＊う蝕は多因子性疾患で、疾患に至る要因の組み合わせは1つではなく、患者1人ひとりで異なっている。個々の患者のう蝕病変発生の背景を知るためには、画一的な検査だけでなく、患者の物語(Narrative)を丹念につなぎ合わせていくようなアプローチが重要で、ここでは歯科衛生士が非常に大きな力を発揮する。細菌に対しても生態学的ブラーク仮説へと変化し、ブラーク中のう蝕原性細菌の構成比率が口腔内環境や生活習慣などにより変化していく可能性が示唆された。このような考え方は近年のマイクロバイームの概念、つまり、宿主と常在菌を合わせて1つの生命体として考え、常在細菌叢の変化が宿主の健康状態に影響を及ぼすということと矛盾しない。したがって、病原性細菌の直接的な抑制よりも、食生活の適正化やホームケアの向上などに重きを置く方が理にかなっているということになる。＊マイクロバイームとは、マイクロブ（微生物）の集合体（オーーム）という意味でフローラ（細菌叢）のことでもある。

歯科評論／2017. 5月号（居樹副委員長 記）

○特集／小児をとりまく最近の臨床トピックス(福本 敏 山田垂矢 他)

＊小児の齲蝕はどんどん減少しています。しかし我々歯科医師は小児の口腔内を守っていくためにまだまだたくさんしなければならぬことがあります。本特集は最近の小児に関する5つのトピックス（形成不全、癒合歯、口の機能と異常、歯周疾患特に低ホスファターゼ症について、外傷）を詳しく解説しています。熟読して、このような小児の患者さんが来院しても落ち着いて対応しましょう。

○下顎総義歯が吸着しないのはどんな時？—吸着の阻害因子に関する調査から

（伊井博樹 阿部二郎）

＊1999年阿部先生が下顎吸着義歯を理論化してから、最近ではかなり浸透し一般的なテクニックになってきたように思います。一方そのテクニックを使っても、なかなかうまく吸着が得られない難しい症例もあるのは事実です。吸着が得られない症例はどのような特徴があり、どのように対処すればいいのか、症例を中心にわかりやすく解説しています。明日からの臨床に是非役立てていただきたいと思います。